

第1部 創作昔ばなし

常田富士男賞

曲がったキュウリ

増田 信

今よりうんと昔のこと。

山と山に囲まれた小さな村に、長吉という少年が住んでおった。

長吉のじい様は、畑できゅうりを育てて、それを町で売って暮らしとった。

長吉はじい様のことが大好きじゃったから、じい様の仕事をよう手伝つとった。畑を耕したり、町へ行って売り子をしたり。

「キュウリ、キュウリ、おいしくて、みずみずしいキュウリはいらんかねえ」

いっばしの商人みたいな声を出して、町の人からも可愛がられたそうじゃ。もつとも、長吉はまだ幼いもんで、そうやってキュウリを売り歩いとるうち

に、腹がぐうぐうとすいて来る。そうすると、売り物のキュウリをこつそり一本取り出して、ポリポリとつまみ食いなんぞしとった。

「長吉、長吉や。今日もしつかり、キュウリを売ってきたか？」

じい様に聞かれて、長吉は思わず

「じいちゃん、今日のキュウリもうまかったで。

じいちゃんのキュウリは日本一や」

なんて正直に言うもんじゃから、つまみ食いがばれてしもうてな、じい様によう叱られたそうじゃ。

そんなある日のことじゃ。

長吉がじい様のうちの庭で草むしりをしとったら、じい様が大きなカゴを背負ってこっちにやっ来てよった。

「おい、長吉、長吉や」

「じいちゃん、どないしたん？」

「庭のあっちの方に穴を掘ってな、こいつを捨てていてくれんかの」

じい様に言われて、長吉はカゴの中をのぞいてみ

た。すると、そこにはたくさんさんのキュウリが、ぎっしりと詰まっとなつた。

長吉はおどろいて、じい様に聞いた。

「このキュウリ、みんな捨てちまうのか？」

「そうや。これは売り物にならんのだじや」

よく見ると、キュウリはどれも曲がっておつて、さわるとブニョブニョしておつた。

「捨てちまうなんて、もつたない。おらがみんな、もらつてもええか？」

「別にかまわんが、おいしゅうないで」

じい様がそう言うもんで、長吉は一本手に取つて、試しにガリリとかじつてみた。

そのキュウリは、実はジクジク、皮はザラザラで、食えたもんじやなかつた。

「何やこれ。ちつともうまくないのう」

「だから言うたんや。残念やけど、こいつらは出来そこないのキュウリやから、捨てるしかなないんじや」

長吉は、曲がったキュウリたちを、何ともあわれに思つたそうじや。

次の日のことじや。長吉は裏山の小川に行つて、

一人で釣りをしとつた。

「今日はさっぱり釣れんのお。もう日がくれそうやし、うちに帰るとするか」

釣ざおをかついで、長吉が立ち上がった、まさにその時じやつた。

「ねえ、ちよつとちよつと！」

突然、長吉は誰かに声をかけられた。こんな山中で誰じや思つて振り向いたが、そこには誰もおらんかつた。

「おらの空耳か？」

不思議に思つて、首を傾げると、

「ここやで、ここ」
声が川の中から聞こえて来よつた。長吉が近付いてみると、川の底からザブンと音を立てて、緑色の

子どもが現れたんじや。

「わわわっ、もしかして、カッパさん？」

その子の手足には水かきが付いとつてな、頭の上にはキラキラとした白いお皿が乗つておつた。もう、どつからどう見ても、カッパそのものじや。

「ぼくはカッパのタロと言うもんです。おどろかせ

てしもうて、すみません」

カツパはそう言うて、長吉におじぎをしたんじや。長吉は目を丸うした。まさか、カツパにきちんとあいさつされるとは、思うてもみなかつたんじやな。「おらは長吉っていうもんや。カツパって、ほんまにおるんやな。おら、初めて見たで」

長吉がそう言うると、カツパのタロさんは、弱々しい声で長吉にこう言うたんじや。

「実は、ぼくは腹。ペコなんです。もう三日も何も食べてないんです」

「えっ、三日も？ 一体どないしたんや？」

長吉はおどろいてタロさんにたずねた。

「ぼくらカツパは、普段はもつと上流の川に住んでるんです。せやけど、最近、川の水が人間たちに汚されて、食べ物が少なくなっけしもうたんです」

タロさんの話を聞いて、長吉は、こりや人間のせいじや、人間がかつぱを苦しめとる、何とかしてやらにやと、そう思うたんじや。

長吉は、どこぞに食べ物はないもんかと、一生懸命考えた。それで、ハツとあることに気が付いたん

じや。

「タロさん、ちよつと待つとつてや！」

長吉は急いでうちまで戻ると、つい昨日、じい様に言われて庭に埋めた、あの出来そこないのキュウリたちを掘り返したんじや。

「長吉、お前、何しとるんや？」

掘り出したキュウリをカゴに放りこんどる長吉を見て、じい様は、キツネにつままれたような顔をしとつた。

「じいちゃん。このキュウリ、みんなおらがもらつていくで」

長吉は、曲がったキュウリを詰めこんだカゴをかついで、えつちらおつちら、急いで川まで戻つて行った。

「タロさん、これ、みんなやるわ」

そう言うて、長吉は曲がったキュウリをみんな、タロさんにわたしたんじや。

「これは、ぼくたちカツパが大好きなキュウリやないですか。こんなにくさんもろてもええんですか？」

タロさん、たくさんのキュウリを見て、よだれをジュルリとたらしとった。

「これは、出来そこないのキュウリなんや。あんまり美味しくないやけど、こんなもんで良かったら、いくらでも食べてや」

長吉に言われて、タロさん、キュウリを一本つかんで、試しにモグモグモグ。

「うまい！ 最高にうまいやないですか！」

タロさん、パーンと手を叩いて、嬉しそうにそう言うたんじゃ。

「ほんまか？ 実がジクジクで、皮もザラザラで、あまりうまくないやろ？」

長吉はタロさんの言葉が信じられなかったもんで、そう聞いてみたんじゃ。

「ぼくらカップは、むしろまつすぐなキュウリの水っぽさが苦手なんです。このキュウリは、ちょうどええです。日本一です！」

タロさん、次から次へと曲がったキュウリを手に取って、ポリポリポリ。あつという間にみんな平らげてしまうた。

長吉は、じい様のキュウリが日本一やとほめられたもんで、それはそれは嬉しそうに、にんまりと笑ったそうじゃ。

それから、長吉は曲がったキュウリが出来るたび、それを持って川まで行って、タロさんにしよっちゅうあげとった。

タロさん、いつも大よろこびで、家族の分や友だちの分まで、曲がったキュウリをおみやげに持って帰るほどじゃった。

そんなある日の朝のことじゃ。

長吉が畑に行こうと、うちを出ると、

「長吉さん、長吉さん」

誰かに声をかけられた。誰かと思ったら、カップのタロさんじゃ。

「あれ、タロさん。こんな所まで来るなんてめずらしいやないか」

長吉が言うのと、タロさんは背負った袋をよいしよと降ろして、こう言うたんじゃ。

「今日は、お礼を持って来たんや」

袋の中から出て来たのは、キラキラと輝くたくさんの白いお皿じゃった。

「これは、ぼくたちカツパの頭のお皿や。これ、長吉さんにあげるで。いつも美味しいキュウリをもらつとる、せめてものお礼や」

長吉はおどろいた。どつからどう見ても、そのお皿は高そうな品物やった。

「タロさん。あのキュウリは捨てるしかなかった出来そこないやで。こんな高そうなお礼をもらつたら、かえって悪いわ」

すると、タロさん、手え振って言うた。

「このお皿も、出来そこないのお皿なんや」

長吉はまたおどろいた。

「えっ、そりやどういうこつちや？」

「このお皿、ぼくらの頭に上手く乗らへんお皿なんや。捨てるしかないお皿や」

「ほな、出来そこないのキュウリと出来そこないのお皿の交換つちゆうことか」

「そういうこつちや。遠慮なくもろうてや」

それで、長吉はありがたく、お皿をもらうことに

したんじや。

「そつか、みんなそれぞれ、ちようどいいもんつちゆうのは、違うんもんやなあ」

「せやせや。お互い、無駄を出さずにすんで良いことづくめや」

長吉はとっても愉快的な気持ちになって、タロさんと二人で大笑いしたそうじや。

タロさんからもろうたお皿は、けっこうな高い値で、町で飛ぶように売れよつた。

長吉のじい様は、そのお金で畑を大きくして、ますますたくさんのおいしいキュウリを作るようになったつちゆう話じや。